

2023年2月25日

論文審査報告書

西南学院大学大学院
文学研究科長 武末祐子様

審査委員

主査 藤野 功一

副査 F. E. オスターハウス

副査 D. A. ファーネル

学位申請者 : 毛利 優花 (Yuka Mori)

論文題目 : TECHNOLOGY AND THE HUMAN CONDITION IN PHILIP K. DICK'S 1960s SCIENCE FICTION: EMPATHY IN ALTERNATIVE WORLDS
(Philip K. Dick の 1960 年代 SF におけるテクノロジーと人間 — オルタナティヴ・ワールドにおけるエンパシー)

審査の経緯

毛利優花氏の学位請求論文は、2022年10月6日に事前審査論文が提出され、学内の事前審査委員会の指導に基づくリライトを経て、2022年12月12日に受理された。その後3名の審査委員による審査を経て、2023年2月13日の最終試験(公開)をもって審査を終了した。

論文の概要

毛利優花氏の論文は、フィリップ・K・ディックの1960年代の代表的SF小説、『高い城の男(*The Man in the High Castle*)』(1962年)、『パーマー・エルドリッチの三つの聖痕(*The Three Stigmata of Palmer Eldritch*)』(1965年)、『アンドロイドは電気羊の夢を見るか? (*Do Androids Dream of Electric Sheep?*)』(1968年)、『ユービック(*Ubik*)』(1969年)の4作品を取り上げ、それぞれの作品において人間の共感能力(エンパシー)とテクノロジーがどのように関連しているかを詳細に考察したものである。ディックのこれらの作品においては、人間が他の人間やあるいは他の存在に対して共感する能力が強調されているが、同時に、もともとは人間が作り出したものであるにもかかわらず、テクノロジーの発展が人間存在のあり方、さらには人間が他者を認識する能力や、他者と感覚を共有する能力に影響を与えていることが示唆されている。本論文では、1960年代当時において一般読者にほとんど知られて

いかなかった先進的な科学概念を念頭に置きながら執筆されたディックの作品が、デジタル・ネットワークが発達して現実と仮想現実の境目が曖昧になっている 21 世紀現代の視点から再検証される。理論的基盤として、マルクスの『資本論』、ホルクハイマーとアドルノの『啓蒙の弁証法』、リオタールのポストモダン理論、ジェイムソンのポストモダン文化論を前提とし、また、ディック作品に関する多くの先行研究を援用しながら、いかにしてディックが近代の人間中心主義的な大きな物語を脱構築してポストヒューマン的な世界観に基づくオルタナティブな視点を導入しているかが詳述される。全体は序章と結論を含む 6 章で構成され、4 章に分けられた本論では年代順にディックの作品が 1 作品ずつ論じられる構成となっている。以下、それぞれの章の概略を述べる。

まず、序章においては、ディックが 20 世紀中葉のいわゆる SF における新しい波（ニューウェーブ）の時代の作家であることが確認される。次に、ディックはその作品においてポストヒューマンの時代の到来を予想し、科学技術の発展が人体改造や、さらにはより人工的な存在の出現を可能にして、人間の存在様式そのものが根本的に変化する様を記述していることが述べられる。さらに人間の共感能力とテクノロジーの関係に焦点を当てて考察すると、高度に発達した資本主義社会において人間は分断されて孤独な状況に陥っているため、共感に基づいた関係を人間同士あるいは人間と人間以外の存在との間に構築するためには、テクノロジーに頼らざるを得ない状況を 1960 年代のディックの作品が明確に示していることが述べられる。

次に、第 1 章では『高い城の男』が取り上げられる。この小説のなかでは古代中国の易経が未来を予見するための技術（テクノロジー）として機能しており、人生の重要な場面での決定において易経の示す予言に頼る複数の登場人物が登場する。これらの登場人物は社会において孤立し、抑圧され、アイデンティティに不安を覚えているため、易経の示すオルタナティブな視点や、現実を超越した他者とのつながりの可能性に強く惹かれる様が描かれる。第二次世界大戦後の 20 世紀を生きる登場人物が古臭い時代遅れの占いに頼る描写は、21 世紀の現代人がデジタル化された情報に頼って自分の行動を決める姿にも重なることが論じられると同時に、その易経の予言はかえってそれぞれ孤立した登場人物たちに他者との繋がりに基づいた世界を再び予感させることが論じられる。

第 2 章では『パーマー・エルドリッチの三つの聖痕』が取り上げられる。この小説では、ある惑星からやってきた実業家パーマー・エルドリッチが人々に幻覚薬を売り、自分の薬を使用した中毒患者を利用して自分自身の支配する世界を作ろうとし、さらには薬物使用者全員がエルドリッチ自身と同化するようにしようとする世界が描かれる。いわばディックがここで描くのは巨大資本による消費者均一化が極限まで肥大化した世界だが、同時に主要な登場人物の一人であるバーニー・メイヤスは幻覚薬を飲んだ世界で経験する仮想世界の中で他者との共感を取り戻し、エルドリッチの世界から再度独立するチャンスを見出すことになる。第一章で登場人物たちが最終的には易経に頼らずに他者との共感に基づいた生き方を取り戻すことが示唆されたように、ここでは脆弱な登場人物たちが幻覚による共感によってかえって自分たちの生きる道を取り戻すことが示される。

第 3 章では『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』が取り上げられ、人間がアンドロイド、電動動物、あるいは人間の気分と他人との共感能力を調節するエンパシー・ボックスといった人工物によって共感を持ちうる可能性が考察される。これらのテクノロジーは単純に人間にとっての便利な道具であることを超えて、人間の共感能力を引き出すテクノロジーとして機能している。主人公のリック・デッカーも、アンドロイドや電動動物に共感する感情が生まれるのを感じる。デッカーの職業が、火星の重労働から逃れて地球へと密航してきたアンドロイドを見つけ出して殺すアンドロイド狩りであることを考えると、彼のアンドロイドに対する共感には彼自身のアイデンティティを否定しかねない。だが、科学技術の発達した未来において精巧なアンドロイドが人間の能力を上回る性能を示して人を感動させ、

「エンパシー・ボックス」が人間の感情をコントロールできる状況の中では、人間はかえって技術に頼って他者との共感を補強せざるを得ないことが皮肉にも示される。こうして、科学技術と人間の共感能力は分ち難く密接な関係にあり、人間の特権的地位を示すはずの共感能力がかえって人間と機械の区別を失わせ、人間とその道具である技術との間に厳然とあると思われていた主従関係あるいはヒエラルキーが掘り崩される様が描かれる。

第4章では『ユービック』が取り上げられる。この作品では、主人公ジョー・チップの高度に発展した資本主義における支配者への反乱が描かれる。チップは惑星間の輸送作業に従事する会社員であったが、輸送途中の爆発事故によって肉体は死んでしまったものの、意識だけは生かされた「半死者」として生き延びることとなる。実業家であり、チップの雇い主であるランシターは、チップのような半死者までも使って事業を成功させようとしているが、一方で肉体を失って純粋な意識体となったチップは肉体の社会的行動を規定するイデオロギーから自由になり、自在に意識のみによって行動できる存在となり、他の半死者との共感を維持することによって、むしろブルジョアジーの資本主義的な欲望や利己的な搾取からも自由となる様が描かれる。高度な技術によって肉体を失った半死者のチップは現世的な欲望から自由になり、かえって、利他的な感覚に支えられた共感を成し遂げるのである。

結論として、これら4作品において、ディックは荒廃したディストピア的な未来においても人間が技術に支えられた共感を成し遂げる可能性を追求しており、それは同時に資本主義的支配による人間の疎外と孤立から人々が逃れる道を示唆していることが論じられる。さらに、資本主義の発達による富の寡占と人間の疎外という大きな物語に対抗するためには、技術に支えられた共感能力に基づく小さな物語の具現化、そしてまた、小さな物語が具体化されることによる複数の世界の成立が必要であることが示唆される。本論文は詳細な分析により、ディックの1960年代の作品は、テクノロジーが人間同士や人間と他の存在との共感関係を再び取り戻すことを助けるばかりでなく、人間のエンパシー（共感能力）をさらに高める可能性を描いていることを論じており、現代におけるディック作品の読みの方向性の一つを明確に示していると言えよう。

論文の評価

毛利優花氏の論文は、フィリップ・K・ディックの1960年代を代表する4作品について、適切な先行研究の引用と原文の精読にもとづく説得力のある解釈を示している。人間の共感能力の高まりは技術の発展によって支えられてきており、仮想現実さえも技術的に作り出せる状況の中では、人間の本来持っている共感能力と技術による感覚の共有効果の境目が曖昧になるとの指摘は極めて鋭く、現代の読者の置かれた状況にも光を当てる議論となっている。さらに、技術発展による人間同士の共感能力の高まりは、高度に発達した資本主義社会によって作り出された人間の孤独な疎外状況を掘り崩し、オルタナティブな世界観を示す可能性があるとの議論は、今後のフィリップ・K・ディックの作品研究のみならず、ポストヒューマンに焦点を当てた今後の文学研究の発展にもつながる豊かな可能性を有している。

しかしながら、本論文には、より議論を深めるためにさらなる改訂を求めなければならない部分があることも事実である。全体としての主張は明確であるものの、同じような議論の展開が繰り返されるため、最終的な結論へと議論が段階を踏んで進むように論点を整理すべき部分が多い。また、キーワードである共感（エンパシー）を含めた主要な用語の概念が非常に広い意味で用いられているために、一つ一つの作品でまったく異なる世界観を有するディックの作品がどれも同じような読みの枠組みで語られているように感じられ、登場人物とそれを取り巻く様々な存在との共感作用を明確に論じ分けて示すことができていないのは残念な点であろう。また、ここで取り上げられた1960年代の4作品はどれもディックの代表作であることに間違いはないが、なぜこの4作品のみを取り上げて、1960年代の他の作品

を研究対象としなかったのかについて、説得力のある説明ができているとは言い難い。さらに、ディックの作品の男性登場人物の多くが明らかに示す男性中心主義的な世界観や振る舞いは、登場人物同士やあるいは人間と人間以外の存在との共感を阻害する大きな要素となっていると思われるが、この点についての言及や分析はなされていない。しかし、これらの点については、今後の研究においてさらに周到な議論を重ね、考察を深めることを期待したい。

このように、議論の展開や用語の定義、あるいは議論全体の枠組みに含めるべき論点にやや不満は残るものの、毛利優花氏の論文は、人間の共感能力（エンパシー）と技術（テクノロジー）に焦点を当てて、ディックの作品における両者の関係についての豊かで示唆に富んだ議論を展開している。今後のフィリップ・K・ディックの作品研究に大いに貢献するものとして、氏の論文を高く評価したい。

以上、学位請求論文の内容、最終試験における応答などから総合的に判断した結果、審査員全員一致で、この研究が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。